写真右――弘安寺山門
写真左――弘安寺観音堂全景

い恋慕するが失恋。一七歳で死去。盛勝、その供養に千歳桜を植樹。

・文永一一年（一二七四）…江川常俊、娘の菩提を弔うために銅造十一面観音及び脇侍不動明王・地蔵菩薩立像の三尊像を長尾原の弘安寺奥院で鋳造。

・弘安二年（一二七九）…盛勝、臨済宗に帰依し、伽藍を造営して三尊像を安置。菩提を弔う。

・正安元年（一二九九）…盛勝、四六歳（推定）で死去。

円満麗艶な慈悲相は常姫か

これまでの伝承を補強する有力な手がかりとして、長尾原の弘安寺奥院がある。これも『村誌』から抜粋してみる。

「鋳造場と伝える所に、お堂裏から佐賀瀬川に通ずる道路の中頃の南側に奥ノ院というのがある。俗に金ゴシ壇といって、畑の中に方一〇米に一五米程の角壇がある。周囲に三米幅の低地が、付近は畑に地ならししても掘りあげた痕跡が残っている。観音像を鋳た時の金滓（かなくそ）を埋めて盛りあげたものと伝える。あるいは四八壇の一つで、古墳でなければ、あるいは経塚ではないかとも思うが、周縁にはいくらか金滓が出るので、伝承に間違いなく、この場所でなくとも、付近で鋳たではないかとも思う。この金ゴシ壇の西北に接して雑木藪の中に長さ九米、幅六米ほどの凹地がある。ここが鋳造の場所ともいう。鋳造には水が必要であるが、付近に水の流れた跡があり、今は水は涸れているが、いくらかは水の得られた場所かも知れない」

ミッシング・リンクも、ここまで辻褄（つじつま）が合ってくればついには輪となって結ばれるとしてもいいのではないだろうか。あと一つ、どうしても少々胡乱（うろん）な伝承をくつがえすことができさえすれば……。

それは、「姫の身長に応じて身丈六尺二分の観音像を鋳」という件（くだり）である。実地調査によれば、寺院縁起の六尺二分も文部省指定書の六尺五寸も誤りで、六尺一寸七分が正しいという。メートルに換算して一・八七メートルである。女性の身丈にしてはあまりにも大きい。盛勝の拒否はそれにあったとする不本意な説もあるほどだが、それは本当だろうか。

今一度、縁起を見てほしい。

「奉鋳観音像、此姫応形、造六尺二分」……「形」には「顔だち・容貌」の意味もあり、「応形」と「造」の間には空白があって文章は続いていないのである。これはむしろ素直に読めば、「姫の顔だちに似せた観音像を鋳て奉った。像高は六尺二分である」となるのではないか。

『村誌』にも、「娘に似た観音像、化仏（けぶつ）を鋳造し」とか、頭上化仏（小仏面）の「如来面の左右は前三面の静寂慈悲相の面で、殊に、向って右側のものは円満麗艶で、その面貌は江川長者の常姫がこのような相貌であったかと想像されるほどの名作である」と書き記しているのである。

幸い、今回は大沢一元住職のご協力をいただき、かなりの程度、鮮明に化仏を撮影することができた。見れば見るほど、まさに円満麗艶な慈悲相である。

写真右――脇侍不動明王像（国重要文化財指定／弘安寺所蔵）
写真左――脇侍地蔵菩薩立像（国重要文化財指定／弘安寺所蔵）

右頁写真――弘安寺銅造十一面観音像。頭上化仏の中央は如来面。山口弥一郎氏の『村誌』では、左右の静寂慈悲相のうち向かって右側が常姫に擬せられている（国重要文化財指定／弘安寺所蔵）